

2 キャリア教育

キャリア教育は、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる資質・能力を育てることを通して、児童生徒のキャリア発達を促すことを目標とする。そのために、各学校では、特別活動を要とし、総合的な学習の時間や学校行事、道徳教育や各教科における学習、個別指導としての教育相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて基礎的・汎用的な能力の育成を図っていく取組が必要である。また、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもったり、振り返ったりする機会を繰り返し設けるなど、主体的・対話的で深い学びの実現が求められる。

具体的には、文部科学省の「キャリア教育の手引き」や愛知県教育委員会の「キャリア教育推進の手引」（義務教育課Webページ掲載）を参考にすることに加えて、児童生徒が活動を記録し蓄積するキャリア・パスポート（キャリア教育ノート）等を活用しながら継続的に指導を行うことで、キャリア教育の充実を図りたい。

※ 愛知県教育委員会では、キャリア・パスポートとして、「キャリア教育ノート（夢を見つけ夢をかなえる航海ノート）」（義務教育課Webページ掲載）の積極的な活用を推進している。

1 キャリア教育が必要となった背景と課題

<p>【学校から社会への移行をめぐる課題】</p> <p>(1) 社会環境の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規学卒者に対する求人状況の変化 求職希望者と求人希望との不適合の拡大 雇用システムの変化 <p>(2) 若者自身の資質等をめぐる課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 勤労観、職業観の未熟さと確立の遅れ 社会人、職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れ 社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向 	<p>【児童生徒の生活・意識の変容】</p> <p>(1) 児童生徒の成長・発達上の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向 生活体験・社会体験等の十分な機会の喪失 <p>(2) 高学歴社会における進路の未決定傾向</p> <ul style="list-style-type: none"> 職業について考えることや、職業の選択、決定を先送りにする傾向の高まり 自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま進学、就職する者の増加
<p>【学校教育におけるキャリア教育の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 職場体験活動等を実施することで、キャリア教育を行ったものとしがちである。 各学年での取組が蓄積された教材が次の学年に引き継がれず、系統的な指導が十分に行われていないことがある。また、小学校から大学まで、校種を越えた学校間の連携が課題となっている。 社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導となる傾向がある。 将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、「働くこと」の現実や、必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視される傾向がある。 教育活動全体の中で基礎的・汎用的能力を育むものであり、小学校段階から特別活動の中にキャリア教育の視点を入れていく必要がある。 	

【社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる基礎的・汎用的能力の育成】

必要とされる諸能力	具体的な要素
人間関係形成・ 社会形成能力	他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ 等
自己理解・ 自己管理能力	自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的な行動 等
課題対応能力	情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善 等
キャリアプランニング 能力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善 等

（「中学校キャリア教育の手引き」平成23年3月 文部科学省）

2 キャリア教育の推進

(1) キャリア教育の目標達成のため、校内組織を整備しよう

学校の教育目標から「キャリア教育で育てたい資質・能力」を見いだし、全教職員が共通理解のもと、協力して全体計画を作成し、円滑に実践していく校内の推進体制を整えたい。

(2) 教職員の共通理解のもとで、キャリア教育の全体計画・年間指導計画を立てよう

全体計画とは、学校教育全体を通じて基礎的・汎用的な能力を育成するために、各学校の教育目標や育成したい能力・態度、教育内容・方法、各教科等との関連を示すものである。

また、年間指導計画の作成に当たっては、各学校が実践している全ての教育活動を、キャリア教育の視点で見直していくことが重要である。

(3) 家庭、地域、関係機関との連携を深め、児童生徒のキャリア発達を促そう

児童生徒のキャリア発達を促すためには、家庭・地域・関係機関が連携することが必要である。学校と家庭、地域社会、関係機関等がそれぞれの役割を自覚し、協働して教育活動に取り組みたい。そうした中で、専門的な知識や情報をもっている社会人等の外部講師から、児童生徒が直接学ぶことのできる機会を積極的に設定し、学習意欲の喚起につなげたい。

児童が活動を記録し蓄積する「キャリア教育ノート」を中学校でも活用し、小・中学校の9年間でキャリア教育を進めていく。そのために、中学校区単位や市町村全体で、キャリア教育担当が教材の内容や、引き継ぐ方法について検討・決定をする。学習の多くにおいて家庭や地域の協力も必要となることから、日頃から学習計画や活動の様子を保護者に知らせ、連携していく。加えて、地域や関係機関等とも連携できるよう、学校便りやWebページ等で、学校のキャリア教育計画について地域に知らせるなど、開かれた学校づくりが大切である。

地域と連携し学びを深めるためには、コミュニティ・スクールを活用することが効果的である。児童生徒の身近な社会である地域において、多くの人と関わり、経験を重ねることは、地域の一員としての児童生徒自身の存在に気付き、新たな学びの動機付けにもつながる。地域の「人」「もの」「こと」を生かしたキャリア教育を体系的・系統的に行っていくことが重要である。

【コミュニティ・スクールを活用したキャリア教育（例）】

- ・ 米作り体験
- ・ 社会人等の講話
- ・ 職場体験の協力
- ・ 地域の史跡の案内 等

(4) 評価（見取りと点検）を適切に行い、指導計画・学習指導の改善につなげよう

ア 児童生徒の学習状況の把握

評価においては、何よりも教員の温かい児童生徒理解が基本であることを確認しておきたい。児童生徒一人一人の興味・関心は個別なものであり、課題や活動に要する時間が異なりそのための教材も固有なものになることが多い。これらの児童生徒の姿は、その児童生徒が有している、その児童生徒なりのよさや可能性の表れであると捉え、支えたい。

イ 学習指導の改善

学習指導の改善は、教員自らが日常の授業を反省的に振り返り、授業を捉え直すことが基本となる。実際に行っている教育活動が児童生徒に育成したい能力や態度等に適切に位置付けられているかを振り返る視点をもつことが重要である。

【学習指導の改善の視点（例）】

- ・ 指導内容が発達段階に合っているか
- ・ 指導方法が児童生徒の実態から見て適切か
- ・ 学習の形態が効果的に組み合わせられているか
- ・ 問題解決や体験的な活動が充実しているか
- ・ 外部人材や地域・文化の活用が効果的であったか 等

(5) 児童生徒の活動記録を蓄積する「キャリア教育ノート」を活用して学びをつなごう

主体的な学びに向かう力を育て、児童生徒のキャリア形成に生かすために、キャリア・パスポートに「キャリア教育ノート」を活用するとよい。

- ・ 有効に振り返りができるように、小学校から高等学校までの記録を一冊に綴じ込み、「学びの記録」とする。
- ・ 地域の実情や各学校の特色等に応じて「キャリア教育ノート」を活用する。
- ・ 進級進学時には、次の学年・上級学校に持ち上がり、継続的かつ系統的に蓄積し、活用する。

【「キャリア教育ノート」の活用】

「キャリア教育ノート（夢を見つけ夢をかなえる航海ノート）」を学年間や校種間でつなげて活用することで、児童生徒に過去の自分を振り返らせたり、教員がこれまでの児童の学びの過程を知ったりすることができる。

<児童生徒にとってのよさ>

過去に自分が書いたことを読み返して、振り返ることで新たな学習活動への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりできる。

<教員にとってのよさ>

「キャリア教育ノート」をつなげて活用することで、体系的・系統的なキャリア教育にもつながり、どのような学習過程をたどってきたか、そこでどのような成長をしてきたかが把握できる。

(6) ICTを効果的に活用し、キャリア教育を充実させよう

ICTを活用することにより、効果的にキャリア発達を促すことが期待されている。例えばWeb会議ソフトを活用し、遠隔地の学校と交流したり、様々な職種の方にインタビューしたりする活動や、電子黒板にそれぞれの考えを表示し全体で共有する活動を行うことができる。また、他地域・海外の学校との交流学习を可能とし、児童生徒同士による意見交換や発表を通じて、思考力、判断力、表現力等を育成することができる。そのために、キャリア教育の年間指導計画に、ICTを効果的に活用した学習活動を的確に位置付けることが重要である。

3 小学校におけるキャリア教育

小学校におけるキャリア教育は、義務教育の9年間を見通した上で、全教育活動の中で意図的・継続的に推進していくものである。特に、小学校での6年間は成長が著しく、社会的自立・職業的自立に向けて、その基盤を形成し、家庭・地域社会・学校の活動の中で自分の役割を果たそうとする意欲や態度を育てる重要な時期である。また、日常的な様々な「役割」遂行の経験を積み重ねながら、計画的・系統的に「自己の生き方」について考えることができるようにしたい。

(1) キャリア教育の充実のための準備をしよう

学習指導要領では、「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と示され、特別活動を中心にキャリア教育を推進するように求められている。その特別活動では、「自己の生き方について考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」という目標が新たに示されている。また、「特別の教科 道徳」では、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」「自己の生き方について考えを深める」というように、キャリア教育との関連が明記されている。総合的な学習の時間の目標には、「自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」と示され、自然体験やボランティア活動等を積極的に取り入れ、探究的な学習を重視するよう示されている。

これらのことを踏まえ、6年間のキャリア教育の全体計画を立てておく。

【小学校のキャリア教育の目標例】

- 自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- 身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上
- 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得
- 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成

【低学年】

自分の好きなこと、得意なこと、できることを増やし、様々な活動への興味・関心を高めながら意欲と自信をもって活動できるようにする。

【中学年】

友達のをさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割が自覚できるようにする。

【高学年】

苦手なことや初めて挑戦することに失敗を恐れず取り組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにする。

(2) 系統性をもたせたキャリア教育を推進しよう

そもそも学校現場では、「キャリア教育に当たる教育活動」が行われている。キャリア教育の推進に当たっては、新たな教育内容を考えるのではなく、現在行っている教育活動をキャリア教育の視点から見直し、指導に系統性をもたせて展開することが大切である。キャリア教育で育てたい能力の育成は、「生きる力」を高めることにつながることから、幼児期から社会人になるまでの長い期間の中で、特に、小学校で育てたい力を発達段階に応じて精選することが求められる。また、前後の接続を円滑にするため、幼稚園・保育所・認定こども園等や中学校等との連携・協力が欠かせない。以下は、キャリア教育を推進する上で留意したい点である。

- ・ キャリア教育の視点を踏まえ、各学年の実態から育てたい児童像を明確にする。
- ・ 学校の課題や地域の願いを把握し、教育目標等にキャリア教育を位置付ける。
- ・ 校内研修を充実させることで、キャリア教育についての共通理解及び指導力の向上を図る。
- ・ 各学年の発達段階を踏まえ、キャリア教育の視点で教育課程を見直し、改善する。
- ・ 特別活動、各教科、総合的な学習の時間等との関連を図り、指導計画を作成する。
- ・ 家庭、地域に対して、キャリア教育について啓発するとともに連携を図る。
- ・ 「キャリア教育ノート」を活用し、学年、校種を越えてキャリア・パスポートを引き継ぎながら、学びの振り返りや見通しに生かすことができるようにする。
- ・ 学習状況、教育活動、指導計画等の観点から、キャリア教育の評価を行い、その改善を図る。
- ・ 中学校区で連携を取り合いながら、中学校へ引き継ぐ。児童がキャリア・パスポートと分かるように留意する。

(3) キャリア教育を実践しよう

- ア キャリア教育を知ろう……校内キャリア教育推進委員会等を設置し、その中心に「キャリア教育担当」を位置付け、教員の研修を推進する。
- イ 学校教育全体をキャリアの視点で見直そう……自校の特色を踏まえ、全校体制で行う。
- ウ キャリア教育の全体計画を作ろう……学年代表が参画する校内キャリア教育推進委員会等で進める。

【全体計画に盛り込むべき項目（例）】

- 必須の要件として詳細に記すもの
 - ・ 各学校において定めるキャリア教育の目標
 - ・ 育成すべき能力・態度
 - ・ 教育内容・方法
 - ・ 各教科等との関連
 - 基本的な内容や方針等を概括的に示すもの
 - ・ 学習活動
 - ・ 指導体制
 - ・ 学習の評価
 - その他、各学校が全体計画を示す上で必要と考えるもの
 - ・ 学校の教育目標
 - ・ 当該年度の重点目標
 - ・ 地域の実態
 - ・ 学校の実態
 - ・ 児童の実態
 - ・ 保護者の願い
 - ・ 地域の願い
 - ・ 教職員の願い
 - ・ 地域との連携
 - ・ 中学校との連携
 - ・ 近隣の小学校との連携
- (「小学校キャリア教育の手引き(改訂版)」平成23年5月 文部科学省)

- エ キャリア教育の年間指導計画を作ろう……校内キャリア教育推進委員会と学年が連携して進める。

各教科については、現在の年間指導計画を利用し、その中でキャリア教育に関わる単元を絞っていく。上に示した「(例)」を参考にするとともに、県教育委員会の作成したDVD「なるほど!! キャリア教育」や「キャリア教育ノート」を活用する。

また、地域探検や農業体験等の体験活動を学年に応じて積極的に組み込み、特に高学年においては、モノづくりの達人を地域から発掘し、講師として招聘するなど、地域の宝を生かしながら学習を進めるようにする。



【なるほど!! キャリア教育】

4 中学校におけるキャリア教育

中学校では、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかりと考えさせるとともに、目標を立てて計画的に取り組む態度の育成等について、体験を通じて理解を深めさせ、進路の選択・決定へと導くことが重要である。このため、各学校においては、キャリア教育の視点で、各教科、特別の教科 道徳、総合的な学習の時間及び特別活動や日常生活におけるそれぞれの活動を体系的に位置付けることにより、能力や態度の効果的な育成を図ることが必要である。

(1) キャリア教育の充実のための準備をしよう

学習指導要領では、「生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じてキャリア教育の充実を図ること」と述べられている。

特別活動の学級活動では、「一人一人のキャリア形成と自己実現」に向け、「社会生活、職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成」「社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成」「主体的な進路の選択と将来設計」、学校行事では、「勤労の尊さや生産の喜びを体得し、職場体験活動等の勤労観・職業観に関わる啓発的な体験が得られるようにすること」が示されている。

また、総合的な学習の時間の目標として、「自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する」ことが示されている。

学校では、右上の表のような目標を立て、教育活動全体を通じ、計画的、組織的にキャリア教育を進めていくことが大切である。また、目標設定や年間指導計画を立てる際には、小学校から高等学校までのつながりを考慮するようにする。

ア 校内推進体制を整備しよう

キャリア教育を組織的に推進するために、校内キャリア教育推進委員会を設置し、その中心にキャリア教育担当を位置付ける。各学校の実態に応じて、キャリア教育の全体計画及び年間指導計画の実施、評価、連絡・調整、実践上の課題解決や改善等を図るなど、推進体制を整備する。

イ キャリアガイダンスの機能を充実させよう

生徒が学校や学級の生活によりよく適応するとともに、現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、ガイダンスの機能の充実を図りたい。相談活動を通じて進路への関心を高めるとともに、人生設計や進路選択を行う能力を伸ばして、将来の生活への適応と自己実現ができるようにする。

【中学校のキャリア教育の目標例】

- 肯定的自己理解と自己有用感の獲得
- 興味・関心に基づく勤労観・職業観の形成
- 進路計画の立案と暫定的選択
- 生き方や進路に関する現実的探索

【1年生】

- 自分のよさや個性が分かる。
- 自己と他者の違いに気付き、尊重しようとする。
- 集団の一員としての役割を理解し、果たそうとする。
- 将来に対する大まかな夢や憧れを抱く。

【2年生】

- 自分の言動が、他者に及ぼす影響について理解する。
- 社会の一員としての自覚が芽生えるとともに、社会や大人を客観的に捉える。
- 将来への夢を達成する上で、現実の問題に直面し、模索する。

【3年生】

- 自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進める。
- 社会の一員としての義務と責任を理解する。
- 将来設計を達成するための困難を理解し、それを克服しようとする。

(2) 体験活動を充実させよう

生徒が将来の社会生活・職業生活を理解し、自分の生き方や進路を考えることができるよう職場体験活動や勤労・奉仕体験、上級学校への体験入学等、啓発的な体験活動を重視する。その際、事前・事後の指導の工夫や、他の教育活動との関連付けが重要になってくる。例えば、職場体験活動等では、将来の夢や職業、働くこと等、自分の生き方について考えることができるよう、3年間を見通した、「キャリアスクールプロジェクト『つなぐ』(中学校)」をもとに、系統的に事前・事後学習を実施していくことが重要である。愛知県教育委員会が作成した「キャリア教育推進の手引」やDVD「キャリア教育生き方メッセージ集」を活用し、体験活動の充実に努めたい。



【キャリア教育生き方メッセージ集】

(3) 生徒の心に灯をともし第三の大人との出会いの場を設定しよう

生徒が成長過程で出会う第三の大人とは、保護者や教員以外の実社会で働く社会人のことである。生徒が、社会人の多様な生き方に触れ、勤労観や職業観を広げることもキャリア教育の目的である。生き生きと働く社会人との出会いは、生徒自身の勤労観を見つめ直す機会となるとともに、将来を前向きに考える動機付けになる。ICTが整備され、オンラインで様々な地域や職種の人と出会うことが可能になった現在、様々な工夫を講じて、可能な限り、第三の大人との出会いの場を設定したい。

(4) キャリア・カウンセリングを効果的に実施しよう

キャリア・カウンセリングとは、生徒が自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別又はグループ別に行う指導援助である。日常のコミュニケーションを通して生徒の主体性に上手に働きかけることは、キャリア・カウンセリングを活用したキャリア教育であるので、効果的に行うとよい。

(5) 学習を見通し、振り返る教材を継続して活用しよう

学校、家庭及び地域社会における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら新たな学習や生活への意欲につながったり、将来の生き方を考えたりする活動は大変重要である。そこで、学年・学校種を越え、継続的に「キャリア教育ノート」を活用するようにしたい。小学校から引き継いだ「キャリア教育ノート」を活用し、自分の成長や変容を実感したり、進路選択に役立てたりする活動は、自己のキャリアを形成する上で有意義なものとなる。



【生き方を考えさせる紙面】
〔キャリア教育ノート 中学校用〕

(6) 保護者・地域社会と共に進めよう

キャリア教育を効果的に進めていくためには、家庭・保護者との共通理解を図りながら進めることが重要である。また、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、企業・NPO・青少年団体・PTA等を含む幅広い地域住民等とキャリア教育の目標やビジョンを共有し、連携・協働して生徒を育てていくことが求められる。